始

國學院
大學講師 文學士 田中義能著

神道史綱要

東京 日本學術研究會發行

324-45C

文學士 田中義能 著

神道史綱要

大正
13.9 5

324.-456

序

凡そ現代の現象を正確に忠實に理解せんには先づ須らく其の由來を詳にせざるべからず。蓋し現代の現象は、今日忽焉として出て來れるものにあらざれば也。されば苟も我が固有の大道、即ち神道に對し、正確、忠實なる研究を行はんと欲するものは、亦、應にそが史的研究を行はざるべからず。予や不敏、敢へて自ら揣らず、此の方面の研究に從事する、年あり。茲に從來研究せる所の神道變遷の概

略を記し、小册子となし、聊か斯道研究者日常の便に供せんとす。若し夫れ詳密なる研究に至りては、予が終生の業、冀くは大方諸賢の高教を得て、之れが大成を得んことを。

大正四年七月　東京に於いて

著者識

神道史綱要

文學士　田中義能（ヨシ）著

造化の三神

熟ら宇宙の現象を觀るに、其の活動は、皆一定の方向に行はれ、盲目的、機械的に活動せるものにあらざるが如し。請ふ靜に之れを觀察せよ。日月の運行、四時の循環、百物の生る、皆秩序もあり、統一もあるを知るべし。その他宇宙の美的性質、經濟的構成、是れ皆大生命の顯現、所謂天地の公道の存在を語れるものにあらずや。我が古傳は此の大生命を造化の三神と稱す。曰はく、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神と。而して天御中主神は高天原即ち天の眞中にまし〳〵て、一切現象の本源にましますと云ふ。蓋し天とは此の大宇宙の謂にして、此の大宇宙を本體とせ

らるゝ天御中主神は無限遍在にましませば、至る所として、此の神のまします所ならざるはなし。從つて平田篤胤は此の大神はしも、無始より座しませば、最第一の神に座すこと申すも更にて、其の御功德の廣く大きなること、稱へ申すべき詞もなしと知るべしと說ける也。此の大神の高大無邊なる御德は、高皇產靈神、神皇產靈神二神によりて顯現せらる。從つて森羅萬象の生々發展、皆此の二神の恩賴によらざるはなし。以上三神は、大宇宙、大自然を本體とせらるゝ神にましませば、勿論我が國のみの神にましまさず。實に世界的にまします也。神道は此の三神を淵源とす。以つて神道の本質の普遍的なるを知るべし。古傳は更に進んで可美葦牙彥舅神のなりませるを傳ふ。蓋し現當世界の萬物の最初の神也。それより種々の神聖を經て天照大神の出現を仰ぐに至る。

天照大神

天照大神は伊弉諾伊弉冊二神の貴子にましまして、人身を有し給ひ、而して能く天御中主神の高大無邊なる御德を備へ給ふ。故に古傳は光華明彩六合の內に照徹しましませりと傳ふ。所謂人道としての神道、實に大神にま創る。大神は耶蘇基督の如く、その生、その死の悲慘なるなし。釋迦牟尼の如く六年の苦修練行、五十年の宣敎說法なし。孔子、ソクラテースの如く不遇なし。是れ大神の云爲行動、終始一貫、理想的の中正にあるが故也。實に大神の御德は、至中至正、至大至高。孔子の門人は、夫子は日月の如しと云へり。大神の御德は實に天日也。天照と云ひ、大日靈貴と云ふ。偉なる哉。天照大神の御德は、以下諸神聖に傳はり、天下の百姓に及ぶ。玆に秩序的統一的思想、現世的快活的感情、發展的膨脹的性格となる。之れを我が國民的精神と云ふ。

我が國民的精神

かゝる思想、かゝる感情、かゝる性格は、天御中主神の御德を蒙れる世界人類普く有せざるべからざる所の者たり。從つて秩序的統一的思想の如き、支那國民も著しく之れを有せり。而かも彼れにありては、古代に於いて已に禪讓放伐の如き擧によりて、殆んどその根本を破壞し畢り

神道の意義

ぬ。快活的現世的感情の如き、希臘人の間にも大いに之れを認め得べく、發展的膨脹的性格の如き、羅馬人の間にも著しく之れを認め得べし。而かも被れ等國民は、至中至正にましましたる天照大神の如き、偉大なる人格神を有せざりしが爲に、不幸にも之れを偏して有せしのみならず、その引續ける國運の沈替と共にその偏せるものをも殆んど之れを銷磨し去れり。獨り我が國民はかゝる精神の精を體し華を集め給ひ、所謂かゝる精神の權化とも稱しまつるべき天照大神其の他種々の神聖を有し、それら神聖の行ひ給ひ、示し給ひし事蹟は、一々國民に偉大なる印象を與へ、政治と云はず、宗教と云はず、道德と云はず、あらゆる國民行爲の規範となり。國民依つて以つて云爲し、依つて以つて行動し、益々我が國民的精神を發揮し、我が國家をして啻に亡滅の厄に超然たらしむるのみならず、却つて愈々之れを興隆し、愈々之れを發展し、我が皇運をして天壤と與に無窮ならしむ。かく古來の神聖の事蹟より由來せる國民の

神道の勢力

云爲行動の根柢となり、規範となる所のものを呼んで神道と云ふ。

かゝる神道は、古代に於いて已に非常なる勢力を有し、當時の國民の知識的感情的意志的要求に應じたりし也。故にそが實際界に現はれては、從來、我が國民の道德界に非常なる影響を及ぼしたる儒教の傳來前に於ける我が國民の道德となりし也。又、我が國民の宗教界に甚大なる勢力を有したる佛教の傳來前に於ける、我が國民を安心立命せしめし所の宗教たりし也。而して恐くも、明治天皇陛下が、明治三年正月三日、勅を下して、朕、恭惟、天神天祖、立極垂統、列聖相承、繼之述之、祭政一致、億兆同心、治教明于上、風俗美于下。と宣はせたるが如く、上古より祭政一致にして、支那王覇の道の傳來せるより以前に、已に政治の道となりし也。その他、神道は、我が國民の實際的生活の總べての方面に勢力を有せし也。

神道と其の變遷

元來、神道の根本は、吾人大和民族が此の身體髮膚を神祖より稟け得

て、子々孫々無窮に傳ふるが如く、又、無窮に傳ふる所のもの也。唯夫れ身體を被ふ所の衣服冠冕は、時代の要求に應じて變遷するが如く、神道の根本の實際界に現はるゝ所、即ち神道の形式着色は、時代と共に種々に變遷するを免れざる也。吾人之れよりその變遷に就いて聊か述ぶる所あるべし。

外國思想の影響

西洋にては已に古代に論理學の如きの研究を見たりと雖ども、我が古代は言擧(コトアゲ)せぬを以て國風とせしかば、神道にも特に言論を立てざりき。而かも、神道は能く我が國民の總べての要求に應じたりしも、朝鮮支那等との交通漸次頻煩となり、文明益〻發達し來るや、從來の形式着色にては、少年が老人の衣服を用ひんとするが如くにて、我が國民の要求を十分に滿足せしむる能はざるに至りぬ。さりとて我が國民には實際界には、豐臣秀吉の如き偉人を見しと雖も、學者には、アリストテレースの如き、カントの如き、組織的頭腦を有せる偉人出でざりき。從つて神道の根本の上に一大學說を組織し、我が國民の要求を遺憾なく滿足せしむるものなかりき。是に於いてか古來比較的に傑出せる人士は、支那に發達せる學說、印度に發達せる學說、西洋に發達せる學說を取り來りて、之れを神道の根柢の幹枝とし、以つて一の完全なる神道の學說を搆成し、我が國民の總べての要求に應ぜんとせり。

儒教の影響

かくて最も初めに影響を蒙りたるものは、儒教也。勿論、儒教は古の聖帝堯舜の創むる所と稱す。而かも彼れ等は、匹夫を擧げて九五の尊を繼がしめて怪まず。又古の聖王湯武の唱ふる所と云ふ。而かも彼れ等は、君主を伐ちて萬乘の位を奪ひて耻ぢず。君臣の大義、上下の名分、その根本に於いて誤れり。從つて儒教の思想は、我が神道の根本に對し、些の貢獻する所あらざりし也。唯彼れ儒教にありては、たとひ大義名分の根柢は喪へりと雖も、而かも一たび君となり、上となりし所謂聖人は、萬民をして大義を守らしめ、名分を正さしめ、自らの地位を維持し、國

家社會の秩序を保存せんことを務むるの結果、忠孝仁義の說に、深遠なる理由を說き得たり。而して今や我が國にありては、人智の發達と共に、固有の神道の形式着色を變ずるの必要を生じたるに當り、儒敎盛に傳來せらる。著しく神道に影響し、之れが形式着色に一層の發展を促したる、爭ふべからざるの事實也。かく儒敎は、神道の發展に貢獻せる所初より少からざりしも、尋いで輸入せられたる佛敎は、之れが發展を一時沮礙せる所ありき。

佛敎の影響

欽明天皇十三年（但し此の年代には異論あり）を以つて輸入せられたる佛敎は、深遠なる哲學的學說に富み、恰も發達し來れる當時の文明の空氣を呼吸せる急進派或は高襟者流の嗜好に投せるのみならず、之れを傳ふるに百濟は王、「是の法は諸法の中に於いて最も殊に勝れたり、解し難く入り難し、周公孔子も尙知ること能はず、此の法能く無量無邊の福德果報を生じ、乃至無上菩提を成辨す。譬へば人の意に隨ふ寶を懷いて用ひ盡すべき所に逐つて情のまゝなるが如し。此の妙法の寶も亦復然り。祈め願つて情にしたがひ乏しき所なし」（日本書紀）と云ひ、且天竺以東の諸國皆之れを禮するの語を附加し、釋迦佛像及び經論等を奉る。先きに輸入せられたる儒敎の崇拜する所のものは天なりと雖も、その天や頗る漠として殆んど拘はる所なし。是れ神道と能く調和し得る所以也。然るに此の佛敎は崇拜すべき對象佛を有せり。而してたとひ神を祭らずとも、能く佛に祈願すれば、無量無邊の福德果報を生じ來るとす。是に於いてか、新奇を好むの人士は、爭ふて佛に歸し、亦神道を奉ぜざるに至れり。是れ神道の發達が著しく沮礙を蒙りたる所以也。

朝廷の態度

當時熱心なる佛敎の信徒たりし、厩戸皇子及び蘇我馬子等は、物部中臣等の神道家を壓倒し、盛に佛敎を興隆せしも、皇子皇位に即かずして薨じ給ひ、蘇我氏亦滅びて、朝廷にも、熱心なる佛敎家を見ざるのみならず、却つて崇佛政治の反動として心を神道に傾けたる政治家の出づる

を見たり。されば、孝德天皇の朝には、蘇我石川麿は奏して「先祭鎭神祇、然後應議政事」と云ひ、天皇は詔して、「公卿百官以清白意、敬奉神祇、並受休祥、令榮天下」と宣ひ、天武天皇五年には、詔して四方に大解除を行はしめらる。大解除は神道の一大儀式也。此れ等の事實に徵して、當時朝廷の態度の如何に固有の神道を維持發展せんとせらたるにあるかを見るべし。

國民の煩悶

夫れ此の如く朝廷には盛に固有の神道の維持發展に努められ、別に『古事記』『日本書紀』等を編纂せられ、神道思想の普及を計られぬ。而して我が國民の多數亦神道を奉せりと雖も、然かも我が國民には由來新を趨ひ奇を好むもの尠からず。かゝる國民は今や茲に無量無邊の福德果報を生ずと云ふ佛を見ては、之れを信せんと欲せざるを得ざる也。又我が國民には、文明の進歩に伴ひ、當時已に幽玄なる學說に渴仰せるものも尠からず。かゝる國民は亦佛敎によりて慰安を得んとせり。かく種々の事情よりして漸次佛敎を信ぜんとせるものを生じ來れり。さたど極めて冷靜なる頭腦を有せるものにあらざるよりは、直に之れに歸し去る能はず。即ち多くは神道思想によりて鎔鑄陶冶せられたる强き精神權威の爲に容易に佛敎に入る能はず。頗る煩悶の狀に陷れり。是に於いてか神佛習合の企圖を見るに至れり。

神道習合

神佛習合は、我が國の諸神を以つて印度の諸佛と元來異るものにあらずとし、神佛の衝突を巧に脫せんとせるにあり。その濫觴は蓋し聖德太子の言にありと云ひ得べし。『大日本史』に曰はく「敏達帝十四年馬子疾あり、奏して佛に禱らんとを請ふ。帝固より佛を好まず。太子聖德に謂ひ曰はく、我が國自ら神あり。今馬子異域の神を祭らんことを請ふ。之れを爲す如何。太子曰はく諸佛の道諸神亦敢へて遠はす(皇子列傳)と。遂に帝は馬子の請を允し給ひぬ。已にして行基出で、盛に神佛を習合し、聖武天皇を勸めて東大寺の大佛を建て、伊勢の太神宮と相對せしめぬ。天皇

はかくて大佛を以つて天照大神と同一神靈の表現なりとの鞏固なる信念を懷き給ひ、皇后太子群臣を率ゐ、大佛に對して北面し、「三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命盧舍那像能大前仁奏賜部止奏久」との言を宣ふに至れり。

傳說の習合

之れを承けて孝謙天皇亦厚く神佛一致の說を信じ給ひ、之れを國民に示し給ひぬ。かく當時の佛敎家は最も巧妙なる方法を案出し、神佛一致の說を主張し、先づ朝廷より之れを信じ給はざるを得ざるが如くし、以つて國民に臨めり。國民亦漸く之れを信じ、先の煩悶を脫し、盛に佛敎に歸せり。

神佛一致の說によりて多くの國民は、皆佛に歸せりと雖も、而かも內心安ずる所を得ざるものあり。蓋し神佛の一致は種々の託宣によりて示さると雖も、我が古傳に一も事實の徵すべきなし。さればやゝ思慮あるものは、尙一種の疑惑を脫する能はざりし也。此の疑惑を脫せしめんが爲に玆に傳說を習合し、本地垂跡を說き、神道の學理を構成するの擧を見るに至りぬ。是れ佛敎的神道の起れる所以也。

佛敎的神道

佛敎的神道の中に就いて、最初のものは山王一實神道也。山王一實神道は僧最澄によりて創めらるると稱す。勿論吾人は彼れが後世謂ふ所の山王一實神道を說きたりと謂ふにはあらず。唯その端を發したりと謂ふのみ。

抑も山王神は元來支那天台山の鎭守也。最澄之れを又叡山に移し祭れるものゝ如し。之れを移すに就いては、「按ずるに日吉神號は、傳敎小比叡峯に於いて三光の日輪を見る。釋迦藥師彌陀の像を現ず。敎その名を問ふ。神告げて曰はく、竪の三點に橫の一點を加ふ。橫の三點に竪の一點を添ふ。言ひ已てその光空に昇つて去る。敎、文字に之れを見るに、竪の三點に橫の一點を山字となす。橫の三點に竪の一點を王字となす。高大不動なるものは山也。三才に經緯たるものは王也。是れより遂に崇んで號して山王と曰ふ」(本朝神社考)と云ふが如き說を作り、山王神の本

地を釋迦・藥師・彌陀の三尊としたりし也。而して叡山には、『古事記』に、「御年神、又娶天知迦流美豆比賣生子云云。次、大山咋神亦名山末之大主神、此神者坐近淡海國之日枝山」と云ひ、已に大山咋神鎮坐しませるも、今、茲に山王神を祭り、釋迦の垂跡を大己貴神とし、藥師の垂跡を國常立尊とし、阿彌陀の垂跡を八幡菩薩とし、合して山王權現となしぬ。斯くて此の山王神は、天台の教義に結び付けられたり。『神社考』の錄する所によるに、山王神は行圓に之れを示せりとなせり。即ち明神嘗て行圓に告げて曰はく、「我れを山王と名く。公之れを委すや。三諦即一を表する也。山王の竪の三畫は空假中也。横の一畫は即一也。王字の横の三畫は三諦也。竪の一畫又一也。二字三畫にして一貫の象あり、故に我れ立てゝ號となす也。一心三觀、一念三千、亦復是の如し。是を以つて我れ台教を護持し、國家を鎮護す」と。かゝる傳に基き、山王とは、三諦一境の稱也。三と雖も而かも一。斯れを極理となす。乃ち一實の謂也と云ひ、或は、

八百萬の神々は、皆此の三諦一實の妙理に基きて、無窮の化道を施し玉ふと云ふが如き、神道説を構成せり。

山王神道に尋いで起りたるものを兩部習合神道となす。之れを兩部神道と云ふ。兩部神道は空海によりて創めらると稱す。然れども山王神道の最澄に於けるが如く、兩部神道が果して空海によりて創められたるものなりや否やは亦一大疑問也。かの『麗氣記』の如き、空海の作と稱し、高野山に秘書として傳はれりとせられたるも、而かも後人の僞作になれるものたるは、諸家の一致する所也。されど此の神道は、山王神道と同じく、神佛一致説の當然に將ち來たすべき結果にして、空海の如き佛教家によりて、少くともその一端の創めらるべきは、殆んど疑の容るべきなき也。かくて吾人は此の神道も空海によりてその端を發せられ、以後眞言家によりて發展せられたるものとするもの也。而して北畠親房が、我が國は神代よりの緣起、この宗の所説に符合せりと云ひ全く兩部神道

を信せるに徴するに、兩部神道の行はれたるの當時已に久しかりしを明に認め得べし。此の神道は、山王神道が、天台教理に基けると同じく、全く眞言教理に基けるもの也。即ち伊弉諾伊弉冉二神を金剛界胎藏界に比し、或は内宮を胎藏界外宮を金剛界とするが如くにしてその神道說を組織せるもの也。

以上述べ來りたるが如くにして、山王神道及び兩部神道は天下を風靡せしも、而かも我が國民的精神の熱烈なるもの、殊に發展的膨脹的性格に富めるものは、かゝる神道を以つては、到底自己の精神の要求を滿足する能はざる也。かの唯一神道が、吾が神道は一陰一陽不測の元、國常立尊以降天照大神に、至る玄々妙々の相承也。天照大神天兒屋命に敎へ給ふ。爾してより以來、濁世末代の今日に至るまで、一氣の元水を汲んで、遂に三敎の一滴を嘗めずと呼號し、我が固有の神道を高尙なる哲學思想を以つて莊嚴せんとして起れる、實に能くその消息を漏せるものと謂ふべし。されど爾かく呼號の大なるにも係らず、その構成せられたる神道は、三敎を嘗むること尠からず。試にその神道の名を見よ、唯一と云ふにあらずや。唯一の語は、『孝德天皇紀』には、帝道唯一の語ありと雖も、而かも世の學者は、一般に、『法華經』に、「唯有一乘法、無二亦無三」と云ひ、『寶積經』に、「一切諸佛、唯是一佛、說無量佛、是名神變、一切佛土、唯一佛土、說無量土、是名神變」と云へるが如きに基くものとす。蓋し事實なるべし。以つて唯一の語の佛敎に基けるものなるを知るべし。更にこの唯一神道の内容を見るに、「吾が神道は、萬物に在りて一物を留めず。所謂風波雲霧、動靜進退、晝夜隱顯、冷寒溫熱、善惡の報、邪正の差、統べて吾が神明の所爲に非るはなし。故に天地の心是れ神也。諸佛の心是れ神也。鬼畜の心是れ神也。草木の心是れ神也。何ぞ況んや人倫に於いてをや。意を以つて理を成す。意を以つて言を成す。意を以つて手足を爲す。皆是れ心神の所爲也。一切の含靈、神に非ずと云ふことなし。

故に成佛と云ふて成神と云はず。物にして神靈を含藏せずと云ふことなし」(名法要集)と。然れども是れ亦佛教に基ける所ならずや。

かくて卜部家にては、神道の學理的方面のみならず、進んで儀式的方面も、皆佛教より取り來り、神道護摩、神道加持などの法を設けり。『鹽尻』に神道護摩の條下に曰はく、「吉田兼倶の子僧九江、吉田山下に一寺を建て神龍院と號。九江法師、此寺に始て行ひそめし法也。然れば僧こそ修すべきに今詞官等傳受して之れを修するは、實に似げなき妄作なり」と云へり。但し神龍院とは、龍女神道を弘法に傳ふ。之れ吉田家の神道の本也。故に善女龍神の名によりて名けしなりと。何れの方面より見るも唯一神道の佛教に基ける多きを見るべし。

北畠親房

當時、戰亂の世なりしも、別に二大神道哲學者の出づるありき。即ち北畠親房及び一條兼良の二卿也。親房は特に三種の神器を重んじ、曰はく、「轉輪王の世七寶具足す。福力の感ずる所たりと雖も、子孫に傳ふる璽符にあらず。夏・商・周の世、九鼎を以つて寶となす。此の鼎は乃ち夏后氏の鑄造する所也。秦・漢より以來、傳國の璽あり。始皇の制する所。李斯の書する所也。我が國の靈器に至つては、神也、又妙也。之れを傳ふるもの即ち神聖、之れを齋くもの即ち天庭。掛も畏き御宇珍子(ウシノミコ)。自ら貴ぶべきは、此の理也」(神國要道篇)と云ひ、進んで曰はく、「鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに是非善惡のすがたあらはれずといふとなし。そのすがたにしたがひて感應するを德とす。これ正直の本源也。玉は柔和善順を德とす。慈悲の本源也。劒は剛利決斷を德とす。知惠の本源也。この三德を翕受すしては、天下の治らんこと、まことにかたかるべし」(神皇正統記)と。かくて彼れは神道を神國の要道とし、大いに神道を以つて天下を統治せんとせり。されど彼れの神道は要するに神佛によりてその說を成せるものなりき。

兼良亦儒・佛及び道教の理によりてその說を構成せり。かくて兼良は「三

種の神器は、神書の肝心、王法の樞機也。何をか王法と云ふ。蓋し儒佛二教一致の道理也。此れを除くの外、豈に異道あらんや。一致の理は亦一心に起り。心外に法なく、法外に心なし。心は即ち是れ神。法は即ち是れ道。一にして三、三にして一。故に三器は即ち一心の標幟也」(纂疏)と云ひ、且つ曰はく、「孔丘の言に曰はく、仁者は憂へず、知者は惑はず、勇者は懼れず。子思『中庸』の書に、之れを三達德と云ふ。聖人の道、大にして博しと雖も、究めて之れを言へば、此の三者に過ぎず、鏡の妍媸を照すは即ち知の用也。玉の温潤を含むは、即ち仁の德也。劍の能く剛利なるは即ち勇の義也」(纂疏)と云ひ、更に三種の神器を佛敎に比し、「鏡の能く照すは般若也。玉の能く潔きは法身也。劍の能く斷ずるは解脫也」と說き、之れを一心に歸し、之れを根柢として、その神道を構成せり。

要するに親房、兼良二卿は皆三種の神器を以つて其の神道說を成せり。三種の神器は我が國家の一大事實。二卿の着眼凡ならざるを見るべし。

一條兼良と殆んど同時に卜部家には、兼倶ありて、盛に吾人の已に述べたるが如き唯一神道の學說を講究組織し、且つ當時の將軍、足利義政及びその室富子の爲に信任せられ、神祇長上たるを公認せられ、天下の神社を支配するの權を得ぬ。足利義尙尋いで立つや、又之れに神書を進講せり。賴襄曰はく、「吾れ嘗て稱す。王業衰へて神道興る。何となれば即ち是れ祖宗の事也。王政盛なる時に當り、誰れか敢へて之れを口舌に騰し、以つて私說を樹てんや。之れを口舌に騰し、以つて私說を樹つるは、卜部兼倶の足利義尙に敎ふるに始まる」(日本政記)と。蓋し卜部家の神道は、殆んど兼倶によりて興隆せられたるものと云ひ得べき也。兼倶の歿後、卜部家には又兼倶の如き器なかりしが、獨り萩原兼從あり。卜部家の嫡傳を承けりと稱す。偶〻江戸に吉川惟足出づ。深く神道に志し、親しく萩原兼從に就いて唯一神道の秘奧を傳はれりと云ふ。

惟足は、從來の唯一神道の說に、親房・兼良二卿の說を折衷し、而して

陰陽五行及び宋儒の説を取捨してその學説を構成せり。殊に注目すべきは、彼れが親房・兼良二卿と同じく三種の神器を尊重せることなり。曰はく、「事を云へば三種の靈寶　理を云へば天子の御心也。三種の靈寶は收まりて胸中にあり。胸中は三種の靈寶に現はる」(神代卷家傳聞書)と云ひ、事相より云へば、天照大神の授與せられし以前にはなきも、理より云へば　己に存せしとし、曰はく、「其理は、伊弉諾・伊弉冉尊、天瓊戈を得玉ひし所より備はりて、天地自然の靈寶也。それを天照大神の受續給ひて、今三種の神器として御附屬あるぞ。事相を以て御附屬ある事、甚深微妙の義、吾國萬國の最上たる事、此一事に明白也」(同上)と云ひ、進んで「三種は鼎の三足の如し、寔に神道の肝心、王法の樞機、代々の御守りとして國土普き光也」(同上)と說きぬ。

度會延佳

惟足と同時に度會延佳あり。「神道と云は、上一人より下萬民まで行ふ且暮の道なり。天神地神より相傳の中極の道を根として行ふ時は、日用の間、神道ならずと云事なし。さして是は神道なりと一々指南に及べき道にはあらず」(大神宮神道或問)と云ひ、又、「中極の道を神道と云事なれば、中道を修行し、正直の御敎を信じて、本心に任し、又正しきに從ふて以つて清淨と爲、惡に隨ふて以つて不淨とすとの神記を恐れて、起居動靜に、心の塵を去り、黑心なく、丹心を以つて、清淨齋愼、左物を右に移さず、右物を左に移さず、左を左とし、右を右とせよとの御敎を守りて、天下の主にてましまさば、天下萬民をあはれみ給ひて、君上の御職分をつくし給ひ、諸臣下は右の御敎を守りて忠をつくし、君につかへたてまつり、一國一家上下も、亦かくの如く、父子、夫婦、兄弟、朋友も、彼の御敎を守りて、父子、夫婦、兄弟、朋友のすべき道をつくし、士農工商までも、かの御敎に順ひて、其の職をつとむるを、左を左とし、右を右とすと申すなり」(同上)と說き、盛に一家の神道を講せり。

山崎闇齋

延佳の神道を聞き、更に惟足の說を承け、惟足より垂加靈社の號を授

かりて立てるものは、山崎闇齋その人也。谷重遠曰はく、「伊勢流『日本紀』に口傳なし。只字面を談ずるのみ。垂加後に卜部の説を聞き、其の傑れる者を擧げ、之れを信守に訂す。信守反つて腹立て聽かず。又、伊勢の明説を擧げて、之れを吉川惟足に質す。惟足亦絶然たり。各自ら贊して他人の説を聞かず。是れ其の弊、久し矣。垂加社の神道、大いに諸説に勝るものは、他なし。偏主なき也。忌部流之れを石手帶刀に聞き、卜部流之れを視吾に聞き、復之れを土津に質す。伊勢流之れを信守及び大宮司精長に聞き、加茂説之れを梨木(祐之)に聞き、諸家の秘を集むる此の如し。實に千金の裘也」(秦山集)と。かく集大成を務めたる闇齋の説果して如何。

彼れ曰はく、「唯一之神道と云事は、異邦の教を習合せざるのみを云に非ず。天人唯一之道と云名目也。天地と人と全く一と云事也」と。以つて我が神道哲學の根柢を得來り、而して實踐哲學の方面に於いては、日神

の道なるものを説けり。即ち彼れは日神即ち天照大神を以つて、至大至高の德を有し、全く天御中主尊と同じ德を保ち給ふと雖も、而かも人體を有し給ふ。是れ此の大神が、人類萬世の師表となられ給ふ所以也となし、而して此の道は人々の具有する所なりとし、曰はく、「道と云は、人々の心に備はりたる天然也、人は天の下の神物と云も是故也。其道を備へても、自ら知らざれば詮すべなし」(天津神籬磐境極秘書)と。已に道は人々具有すと雖も、自ら知らざれば詮すべなし。是に於いてか教を要す。故に又曰はく、「神道は天人唯一にして、道は日神の道、教は猿田彦の導き給ふ處、土金の教天人を貫く敬の至り也」(同上)と。かくて彼れは宋儒の説を取り來りて其の神道を説けり。

吾人の以上述べ來れる唯一神道以下の種々の神道説は、皆我が固有の神道の思想を發揮せんことを努めたるものなりと雖も、而かも皆又或は佛により、或は儒に附會して、その説を構成せり。從つて荷田春滿の所

謂陰陽五行家の說、圓頓四教儀の解、唐宋儲儒の糟粕にあらずんば、則ち胎金兩部の餘瀝、鑿空鑽穴の妄說にあらずんは、則ち無證不稽の私言。曰はく秘曰はく訣、古賢の眞傳何くにかある。或は蘊或は奧、今人の僞造是れ多しとの誹を免れず。此の間にありて統を直に古代に接し、我が固有の神道の正脉を承けて起れるものあり。之を復古神道の一派となす。

統を古代に接す

復古神道の起れるは、正しく古語學の勃興にあり。古語學の勃興は、近畿の二大古語學者によりてその端を發せらる。二大古語學者とは即ち下河邊長流及び契沖是也。

下河邊長流

長流は大和の人、字多に生る。本姓小崎氏、母の姓を冒し下河邊氏を稱す。通稱彥六。名は具平、後長流と改む。夙に古語を研究し、造詣甚た深かりき。德川光圀、招きしも應せず。乃ち紙筆を與へて「萬葉」の注を求む。果さずして貞享三年六月三日歿す。行年六十三。

圓珠庵の契沖は浪華の人、本姓は下川、字は空心。幼にして出家せり。學儒佛を兼ね、博覽多識、長流と同じく夙に我が古語を研究し、發明せる所多かりき。德川光圀の囑により『萬葉代匠記』を著はし、其他多くの著書をなして斯學に貢獻せる所尠からざりき。元祿十四年歿す。年六十二。長流契沖の斯學に致せる功大は則ち大なりと雖も而かも、彼れ等は要するに語學者也。神道學者にはあらず。所謂古道學者とは謂ふべからざる也。初めて古道としての神道を建設したるものは、荷田春滿その人也。

荷田春滿

春滿、幼名鶴丸。長じて信盛と云ひ、後春滿と改む。稻荷山の神官、荷田宿禰信詮の嫡子也。夙に國學に志し、社務を弟信名に讓り、學者を求めて四方に遊學し。元祿十二年江戸に出で修學十四年。遂に京師に歸り、盛に復古の學を唱へぬ。篤胤記して曰はく、

儲、その學業の詳なる趣は、幼より學を好み、篤く皇道復古の學に志して、國史、律令、古文、古歌及び諸家の記傳に至るまで、該博通せざる所なし。然れども師尙する所なく、而して其自得發明する所極

めて多し。享保中に江戸に遊びて聲名あり。特に內命ありて侍臣某をして從遊せしめて、古書を校せしめ給ふ。居ること數年にして疾を得て京に歸らる。已にして伏見奉行北條遠江守をして、內命を傳へて銀若干を賜ふ。大人嘗て國學校を創立する志ありて。上書して執事に啓するに未だ報あらずして歿せり。其志は遂げざれども、其言は傳ふべし。(玉襷)

と。又、曰はく、

此翁の著書は、故ありて春滿は著はす所少かりしも其の大部分は終焉に臨み門人をして皆焚かしめぬ。世に傳れる物少けれども、すべて吾が古學の規則は、此翁に相立初申候。(入學問答)

と。以つて春滿は嚴格なる意味に於ける古道學の祖となすべき也。彼れ常に曰はく

學びの道は、天の下の大路なれば、己ひとり立らむが如くほこるべ

からず。學ぶ人も師の敎なりとてあながちに泥むべからず。(春葉集序)

と。此の訓陶を受く、その門下豈に偉器なからむや。果して賀茂の眞淵その門に出でぬ。

眞淵は元祿十年を以つて遠江國敷智郡岡部に生る。通稱參四。後改めて衞士と云ふ。眞淵はその名也。父は岡部の新宮の禰宜定信、母は竹山氏。幼にして姉夫政盛の養子たりしが、後去りて濱松の本陣、梅谷甚三郎方良の養子となりぬ。初め徂徠派の渡邊蒙菴に就いて漢籍詩文を修めしも、壯なるに及び心を古道の學に傾け、春滿に見えて益々その志を深くせり。篤胤記して曰はく、

此のほど濱松に二人の友あり。諏訪の社の大祝杉浦信濃守國顯と、五社の神主森民部少輔暉昌となり。此二人ともに東麿大人の敎子なるに、況て國顯が妻マサキといひしは、荷田の大人の姪なりなりしかば、大人江戸に物せらるゝ時々は、此家に宿られける。故に此人々の執り

もちにて、荷田の翁に見えそめられしとぞ。(玉襷)

と。爾來、荷田の學風を慕ひつゝありしが、遂に享保十八年京師に上り、その門に入りぬ。時に年三十七。荷田門に在學する四年、その篤き教授を受けしが、偶〻春滿歿せしを以つて、元文二年鄕に歸り、翌年江戸に出で、茲に初めて古道の學を唱道せり。篤胤曰はく、

是は、荷田翁の上を一層高く見解を爲し、始めて古の道を明らかに知らんとするには、漢意佛意を清く捨果ざれば、其眞を得がたく、歌を詠(ヨム)も、古言を解釋するにも、凡て古道を明らむべき梯(ハシダテ)なる由を言ひ誨(オシ)され候。(入學問答)

と。

徂徠已に死し、鳩巢亦逝き、東涯新に物故し、さしも旺盛を極めたりし儒林、巨星の連沒に遇ひ、轉た寂寥の觀なき能はず。此の時に膺り、眞淵、千代田城下に高く標榜して古道の學を唱ふ。名聲忽ち遠近を風靡

本居宣長

し、俊才爭ふてその門に輻輳す。延享の三年、田安侯召して古學の博士となしぬ。德川伯爵家の「悠然公略傳」に曰はく、

賀茂眞淵を徵し侍臣となす。給するに稟米を以つてす。歌書を搜索し日々講論す。啓發する所あり。眞淵國學に長じ、最も萬葉に善し、古風の學者今に至り仰いで泰斗と爲す。(賀茂眞淵翁全集)

と。眞淵、田安侯に仕ふること前後十四年、入つては侯に侍し、出でゝは著書に從事し、門人を敎化せしかば、古道大いに起り、藤原宇萬伎、楫取魚彦、本居宣長、荒木田久老、加藤千蔭等の人才を出しぬ。中に就いて本居宣長を出藍の器となす。

宣長は、伊勢松坂の人。享保十五年を以つて生る。父は三四右衞門定利、母は村田氏。家初め北畠氏に仕へしが、後下りて商賈となり、定利の當時二個の支店を江戸に置き、巨萬の富を致したりき。然るに幾ばくならずして家道衰へぬ。元文五年定利歿す。時に宣長年僅に十一。義兄

定治家を嗣ぐ。寶暦元年定治亦歿す。宣長乃ち家を嗣ぐことゝなりぬ。時に年二十二。當時宣長が一家の狀態を見るに、江戸の支店は已に閉ぢ家產としては親戚小津氏に托したる四百金の利子あるのみ。宣長の母以爲らく、

跡つぐ彌四郎(宣長の幼名)あきなひのすぢにはうとくて、たゞ書を讀むことをのみ好めば、今より後商人となるとも事ゆかじ。又家の資も隱居家(小津氏のこと)の店衰へぬればゆくさきうしろめたし。若かの店事あらむにはわれ等何を以つてか世を渡らむ。かねて其心づかひせではあるべからず。然れば彌四郎は、京に上りて學問をしくすしにならんこそよからめ。(家の昔物語)

と。宣長乃ち寶暦二年を以つて京師に上り、儒堀景山の門に入り、先づ儒學を修め、同四年典藥武川幸順に就き初めて醫學を學べり。かくて宣長偶〻契冲の「百人一首改觀抄」、「古今餘材抄」、「勢語臆斷」等の書に接し、茲に

古學研究の志を起しぬ。

宣長年二十八、松坂に歸り、醫を開業せり。當時彼れ又眞淵の「冠辭考」を得、益〻古學神道研究の志を深うし、更に「冠辭考」を熟讀するや、愈〻眞淵に接せんの希望を起しぬ。乃ち記して曰はく、

かへす〳〵讀み味ふほどに、いよ〳〵心ざし深くなりつゝ此大人をしたふ心、日にそへてせちなりし。(玉勝間)

と。偶〻眞淵松坂に來るに會し、初めて刺を通ずるを得たり。眞淵一たび見て宣長の偉器たるを認め、胷襟を開いて之れと道を語り、江戸に歸るや、門弟子を集めて宴を設け、賢才を得たるを祝したりと云ふ。

勿論、宣長、江戸に出でゝ眞淵に朝夕親炙する能はざりしと雖も、爾來、文書を以つて盛に交通し、眞淵の指導の下に熱心研究に從事し、一方に於いては終生の大業たる「古事記傳」を編纂すると同時に、「直日靈」、「葛花」、「馭戎概言」、「玉匣」(クシゲ)等幾多有益なる著書を公にせり。

「古事記傳」

天明七年、紀伊侯より政治經濟の事を問はれ、先きに著はせる王匣と共に、新に侯の爲に「秘本玉匣」を著はして奉れり。是れより、屢、和歌山に赴き、紀伊侯の爲に道を講じ、內にありては門人日に進み、厚く之れが敎育に從事せり。かくて寛政十年に至り、「古事記傳」全く成りぬ。彼れ自ら曰はく、

「古事記傳」も、當月十三日全部四十四卷、卒業。草稿本書立申候。明和四年より書はじめ、三十二年にして終申候。命の程を危く存候處、皇神の御めぐみにかゝり、先存命仕りて生涯の願望成就仕、大悅の至に存候儀に御座候。(與荒木田久老書)

と。實に「古事記傳」四十四卷の洪著は、宣長終生の大業、研究考覈、苦辛慘憺、博く諸書に涉り、深く群籍を獵り、識見卓拔、實に古道學の寶典たるに足る。

かく宣長、苦辛慘憺、研究考覈せしかば、その博學宏才、實に天下を驚倒せしめたり。享和元年九月二十九日歿す。年七十二。著はす所、五十部、百三十餘卷に達せり。

神の意義

宣長は先づ神の意義を以つて、尋常に卓越せる德を有し畏るべき性能を有せるものとし、古典に見ゆる天地の諸(モロ〳〵)の神だちを初めて、そを祀れる社に坐す御靈をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獸木草までも皆かゝる德を有するものは神となしぬ。從つて宣長は神に善惡ありとし、吉凶禍福も之れによりて生ずとなせり。されど彼れの主張にかゝる「神の道」の神なるものは、必ずしも鳥獸草木までも意味する神にはあらざるが如し。

道の字義

故に彼れ曰はく、「皇國の神道は、皇祖神の始め賜ひたもち賜ふ道なり」と。以つて彼れの神の觀念知るべき也。吾人は更に進んでその道なるものに就いて述べざるべからず。彼れは先づ道なる文字を解して曰はく、

美知は御路(ミチ)にて、知と云ふが本語なり。今も山路・野路・舟路・通ひ路などは、知とのみ云ふを以(モ)て知るべし。それに美をそへて美知と云ふな

り。『古事記』に味御路、『日本紀』に可怜御路とある、是れ神代の古言なり。されば知と云ふも、美知と云ふも同じ事にて、共に通路の意のみにて、其外の義は、上古は更になかりしなり。(私叙言)

と。誠に宣長の言の如く、我が上古には凡べての事象に就いて、一般に理論的研究を行ふの風存せざりしを以つて、美知なる語に就いても、具體的なる通路てふ意義の外、抽象的なる道義の觀念は存せざりし也。されば宣長亦曰はく、

道てふ言論

古の大御世には、道といふ言擧も、さらになかりき。(直毘靈)

と。然れども人若し宣長がかく道てふ言擧もなかりきと云へるを以つて、直に彼れが上古に於ける道なるものゝ存在を認めざるものとなさば、是れ宣長を誣ふるもの也。彼の沼田樂水が、右の

沼田順義字は道意。樂水と號す。上野の人。夙に儒を學び、更に醫を修めり。壯年明を失ひ、檢校となる。盛に宣長の說を駁せり。嘉永二年十二月十七日歿す。年五十八。

宣長の言を評して、

こはきたなき震旦書ちふからぶみが中にも、とりわきて嗚乎なるをのこどものいひ出づる、『老子』となむいへる書のことの葉に似かよひて、民をうまれのまゝにおかんとする妄說なり。それものありてのちにこそ名ちふこともあんなれ。たとひ神代に道ちふ言擧はあらじとも、道ちふ事はなからずやは。(級長戸風)

と。かく彼れは宣長が道といふ言擧もなかりきと云へるを、甚しく非難せりと雖も、而かも其の結論の同一に歸せるは、非難の正鵠を失せるものにあらずや。彼の樂水の物ありて然る後名ありとせるは、吾人其の理たるを認む。而かも是れ決して宣長の論據を動かすに足らず。蓋し、宣長が上古に道てふ言擧もなかりきとせるは、樂水の解せるが如く、道なしとせるに非れば也。之れを彼れの言に徵せよ。曰はく、

皇國の古は、さる言痛き敎も何もなかりしかど、下が下まで亂るゝ

最上の大道

ことなく、天下は穩に治まりて、天津日嗣いや遠長に傳はり來坐せり、されば、かの異國の名にならひていはゞ、是ぞ上もなき優れたる大き道にして、實の道なるが故に、道てふ言なく、道てふことなければ、道ありしなりけり。（直毘靈）

と。かくて、彼れは我が上古に大道は嚴として行はれしと雖も、而かも敢へて之れを道と稱せず。後、彼れの文物輸入せられ、道なる文字の用ひらるゝ場合を知り、初めて我が大道に名くるに神の道を以つてせりと、なせり（私淑言）。然らば則ち、支那印度の思想を混入せざる我が固有の大道なるものは、抑も如何なるものぞ。是れ宣長の全力を擧げて主張せる所の大いなる道也。彼れは曰はく、

此道は、『古事記』『書紀』の二典（フタマツフミ）に記されたる、神代上代の、もろ〳〵の事跡のうへに備はりたり。（初山踏）

と。更に曰はく、

經典なし

道は、此二典にしるされたる、神代のもろ〳〵の事跡のうへに備はりたれども、儒佛などの書のやうに、其道のさまを、かやう〳〵と、さして敎へたることなければ、かの儒佛の目うつしに之を見ては、道の趣、いかなるものとも知りがたく、とらへどころなきが如くなる故に、むかしより世々の物しり人も、之をえとらへず、さとらずして、或は佛道の意により、或は儒道の意にすがりて、之を說きたり。其內、昔の說は、多く佛道によりたりしを、百五六十年以來は、かの佛道によれる說の非なることをばさとりて、其佛道の意をばよくのぞきぬれども、その輩の說は、又皆儒道の意に落入て、近世の神學者流みな然なり。其中にも流々ありて、すこしづゝのかはりはあれども、大抵み な同じやうなるものにて、『神代紀』をはじめ、もろ〳〵の神典のとりさばき、たゞ陰陽八卦五行など、すべてからめきたるさだのみにして、いさゝかも古の意にかなへることなく、說くところ悉皆儒道にて、た

名のみぞ神道には有げる。されば世の儒者などの、此神道家の説を聞て、神道といふ物は、近き世に作れる事なりとて、いやしめ笑ふは、げにことはりなり。（初山踏）

國史の成跡

と。かくて宣長は固有の大道を以つて、世の所謂神道なるものとは、全く異るものにして、専ら『記』『紀』二典に記されたる事跡の上に備はるものとなせり。而して説いて曰はく、

神の道の意義

そも此道はいかなる道ぞと尋ぬるに、天地おのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、此道はしも、可畏きや、高御産巣日神の御靈によりて、神祖伊邪那岐大神、伊邪那美大神の始めたまひて、天照大御神の受たまひ、たもちたまひ、傳へたまふ道なり。故是以神の道とは申すぞかし。（直毘靈）

と。彼の樂水の如きは亦之れを攻撃して曰はく、

道は天津理のまゝなるものならば、そのまゝ天御中主尊の御心なり。

天と天御中主神

故天御中主尊の御靈によりてなれりといはむにはさるべきを、高御産巣日神の御靈よりなれりといへるは、いたき誣言なりけり。高皇産靈尊は、現身の神にてわたらせ給ふなり。（級長戸風）

と。之れは是れ儒教的天の見解を以つて、宣長の説を駁せるもの。到底俗に所謂水掛論に了らんのみ。蓋し儒教には多く天を以つて、天帝若くは上帝に解し、之れを萬物の主宰者とす。此の天を以つて、我が天御中主神に配す。絶對的に不可なりと云ふべからざるものあるに似たり。而かも宣長は爾かく解せざる也。彼れは吾人の已に述べたるが如く天御中主神を以つて單に天眞中に坐々て、世中の宇斯たる神（古事記傳）と解し、唯一宇宙の大綱を取り、其の秩序を維持せらるゝの神とのみ解し、從つて森羅萬象の生々發展するは、產靈二神の御靈によるものとせり。是れ神道の由て來る所を此の二神に歸せる所以也。故に更に曰はく、

まことの道の趣を、あら〳〵申さむには、まづ第一に、此世の中の

惣體の道理を、よく心得おくべし。其道理とは、此天地も諸神も萬物も、皆、ことゝく其本は、高皇產靈神、神皇產靈神と申す二神の、產靈のみたまと申すものによりて、成出來(ナリイデキ)たるものにして、世々に人類の生れ出で、萬物萬事の成出るも、皆此御靈にあらずと云ふことなし。されば神代のはじめに、伊邪那岐伊邪那美二柱の大御神の、國土萬物、もろ〳〵の神だちを生成し給へるも、その本は皆かの二神の產靈の御靈によれるものなり。(玉匣)

足らざる所なし

と。以上述べ來れるが如くにして、宣長は、道の起源は、高皇產靈神神皇產靈神二神にありて、此の二神の御靈によりて、伊弉諾伊弉冉二神種々に之れを發展せられ、天照大神その根元大本を示され、その他の諸神祇亦之れが種々の方面を示され、從つて道は神代の事跡に皆備はりて、不足せる所なしとなせる也。

以上宣長の神道說の概要也。其の說は彼れの嫡子春庭、養子大平、門人服部中庸、齋藤彦麿、植松有信、渡邊重名、鈴木朖、城戸千槍、村田春門、藤井高尙等によりて盛に提唱せられたり。殊に本居大平の如きは、養子內遠、加納諸平、足代弘訓等一千餘人の門下を養成し、陸離たる光彩を發揮せり。尙宣長の歿後に門人となりて、國學界に傑出せしもの二人あり。之れを平田篤胤及び伴信友となす。吾人是れより進んで聊か此の二人に就いて述ぶべし。

秋田の人

篤胤は、秋田の人。安永五年八月二十四日を以つて生る。父は大和田祚胤、母は那珂氏。篤胤はその第四子たり。幼名は正吉、大壑と號し、伊吹の屋と稱す。年甫めて八歲、儒學を藩儒中山靑莪に受く。已にして篤胤の生母那珂氏歿し、繼母小野氏入る。篤胤年二十、乃ち鄕關を脫し、絕大の志を抱いて江戶に來りぬ。苦學前後五年。偶〻松山の板倉侯の臣平田篤穩に知られ、その養嗣子となり、爾後、學業に專心することを得たり。享和元年篤胤年二十六、初めて宣長の著書に接す。之れを見て深く

宣長の著書に接す

盛名天下に鳴る

その學に服し、直に名簿を松坂に送り、その門人たらんことを求む。會宣長歿せしを以つて茲に所謂歿後の門人となりき。是れより全く一身を國學に委ね、研鑽年久しく、遂に欝然一家をなせり。先づ『呵妄書』を著はして、大宰春臺を罵倒し、『鬼神新論』を著はして、儒者を叱斥し、而して後『古史徵』・『古史成文』・『靈能眞柱』等を公にして、進んで積極的に復古神道を天下に唱ふ。天下負笈の士集り來りて其の門に投ず。文政六年著書數部を提げて京師に入り、之れを禁裡及び仙洞に献ず。茲にその著書は天覽叡感の四字を冠し、一層の光輝を放つに至れり。かくて當時有力なりし吉田家は、篤胤を聘して神官の教授たらしめ、神祇伯白川の資敬王は、篤胤を擢んじて學師の重職に任じぬ。是に至り篤胤の盛名赫々天下に鳴る。秋田藩見て大いに喜び、その歸藩を求む。是れより秋田藩士となれり。既にして篤胤の熱心なる敬神尊王の說は、動もすれば幕府成立の基礎を危くせんとするの虞あり。戢々兢々家康の業を失墜せんこ

宣長の說に盲從せず

とを恐るゝ當路の吏、遂に默する能はず。江戸を追ひ、國に歸らしめ、且つ將來の著書を禁せり。天保十四年閏九月十一日篤胤遂に秋田に歿しぬ。年六十八。東脩の門人五百五十餘人。歿後の門人一千三百餘人に及べりと云ふ。著はす所、右に擧げたるもの丶外、『古史傳』三十二卷、『古道大意』二卷、『大道或問』一卷、氣吹颯』二卷、『俗神道大意』四卷、『印度藏志』二十五卷、『出定笑語』六卷、『赤縣太古傳』三卷、『西籍概論』四卷等百有餘部あり。

篤胤、資性豪悍不屈、嘗て道を說き道を學ぶものは、人の信ずると信せぬとに少しも心を殘さず……獨立獨行……眞の道を學ぶと云へり。されば、宣長が歿後の門人となり、深く宣長を尊崇せりと雖ども、その學說は、純粹に之れを紹述せるにあらず。今茲にその主なるものを述ぶれば、神道創世の說に於いて、彼れは高皇產靈神皇產靈二神天地を鎔造せられたりと云ふ宣長の說を遵奉せりと雖も、宣長が高天原を虛空の上

の國とせるには反對し、之れを北極の上空なりとし、又太陽なりと主張せり。次に宣長は夜見國を以つて支那の黃泉と同一視し、死して靈魂の赴く所と解せり。然るに篤胤は、人の靈魂の赴く所は幽冥にして、古傳の夜見國は月球なりとなしぬ。かくて篤胤は、太陽は高天原にして、天照大神之れを統治し、地球は皇孫命の統治せらるゝ御國也。月球は即ち夜見國にして、素盞嗚尊の統治せらるゝ所となしぬ。以つて彼れは宣長の未だ手を附けざりし、西洋天文の説を取り來りて茲に地動説をも唱へぬ。曰はく、

地動説

天つ日は高く上に位を定めて動き轉ることなく、地は元よりのまゝに漂旋り、月泉は地の底に成りて、もと地に漂ひ旋れる物なるけにや、斷れ離れて後もその如く、地に屬て旋ること今の現に見るが如し。これ等のことすべて神の產靈の奇く妙なる理によりて然るなれば、更に人の小き智をもて、とかく測識るべき限にあらず。（靈能眞柱）

と。かくして彼れは當時一部の學者の間に漸く盛に行はれ來れる西洋の學理を應用して、その學説を構成し、而して是れ皆我が眞の古傳なりとなしぬ。

宣長學の紹述

篤胤は、その神道説に於いては、殆んど忠實に宣長の學を信奉せり。曰はく、

この天地を御造り遊ばしたる天つ神、高皇產靈神・神皇產靈神の始まして、伊邪那岐・伊邪那美神の御受繼あそばして、世にありとある事物の本を御始なされ、又その事物を悉に持分けしろしめす神々を御生なされて、其功德は天照大御神に御傳へあそばし、偖、皇御孫邇々杵尊、御天降り遊ばさるゝ時、天御祖產靈の御神、天照大御神より、皇御孫命の御代々、天の下を知し召す御政のやうを御傳へあそばし、偖、御代々の天皇其の御依しのまに〳〵、己命の御さかしらを御加へあそばさず、天地と共に御世しろしめすことぢやが、斯道をさして、神道と

申したる云云。(俗神道大意)

と說き、尙、自家の神道を古道と云ひ、

抑も古道と申候は、何の事もなく古の道と申すことにて、其は天皇祖神のこの天地を御造りなされ候を始め、上代の事實の上に備はり候。眞の道を聊も外國風の說を混へず、純粹なる古意古言を以つて、すなほに說明し、その事實の上にて、天皇命の天下を治め給ふ御政の本をも、人道の本をも知り候學問故、古學と申し、その道をさして古道とは申候事に候。(入學問答)

と說けり。彼れが此れ等の言の示すが如く、彼れの神道說は、徹頭徹尾宣長のそれの紹述也。敷衍也。

要するに篤胤の學說は、高天原及び夜見國を說くの點に於いて、幽冥を云ひ、未來を論じ、復古神道に大いに宗敎的色彩を與へしの點に於いて、深く佛敎を研究し、盛に破佛論を唱へしの點に於いて、熱心に諸子

若狹の人

百家を研究し、殊に玄道を取り來りて、自家の學說構成の用に供せしの點に於いて、その他種々の點に於いて、宣長學の範圍を逸脫して、一家の見を立せしは吾人の深く注意せざるべからざる所也。就中篤胤が、天御中主神を以つて無始無終の神とし、『古事記』の『成神』を『古史成文』に『有神』に改めたるが如き、然りとなす。篤胤の門に、養子平田鐵胤、生田國秀、佐藤信淵、大國隆正、六人部是香、權田直助、矢野玄道、久保季茲等出で盛に篤胤の說を唱ふ。されど吾人は筆を轉じて伴信友に就いて述べん。

信友亦篤胤と同じく宣長歿後の門人也。幼名鋭、後、州五郎と改む。事負と號す。安永二年二月廿五日を以つて若狹國小濱に生る。父は山岸次郎太夫惟智。母は片岡氏。信友はその第四子也。天明六年年甫めて十四、小濱藩御勘定頭伴信頭の養嗣子となり翌年江戸に來り住す。天明八年初めて藩に出仕し、爾來精勤屢〻賞賜せらる。公務の餘暇、心を國學に傾け、研鑽年あり。偶〻宣長の『古事記傳』、『詞の玉の緒』等の書を得て、深

くその卓見に服し、敬慕措かず。遂にその門に入らんとす。而かも紹介を托するものなし。人あり、村田春門の宣長が門人たるを告ぐ。乃ち春門を介して入門せんことを求む。春門快諾、書を松坂に致して、信友の名簿を送り、且つその志を告ぐ。時に享和元年にして恰も宣長の歿せる後たり。嗣子大平信友の志に感じ、名簿を靈前に供へ門人に列す。當時信友年二十九、已に著書に著手し、以後年として殆んど二三種の稿を脱せざるはなかりき。文政四年に至り、病により仕を辭し、是れより全く學者の生活に入り、日夜書齋に蟄居し、社交を絶ち、書籍堆積の間に端坐し、深更に至るも筆を措かず。專ら著書研學に從事し、嚴寒酷暑と雖も一日も之れを廢せず。吾人此れ等の點に於いて遙に英吉利のスペンサーを聯想す。殊に信友が攝生の道を重んせしは、全くスペンサーと一致せり。信友嘗て杉田玄伯に攝生の道を問ふ。玄伯七不可を書して答ふ。

七不可とは何ぞ、曰はく、「昨日非不可恨悔。明日是不可慮念。飲與食不

可過度。非正物不可苟食。無事時不可服藥。賴壯實不可過房。勤動作不可好安」と。信友之れを得て深く喜び、能く之れを守りたりと云ふ。

信友資性謙抑にして、名利を求めず、天下負笈の徒、その名を聞き來りてその門人たらんことを請ふもの甚だ多かりしも、皆之れを謝し曰はく、「吾が學、人の師たるに足らず」と。强ひて請はゞ乃ち之れを學友となす。本居大平の門人、加納諸平に與ふる書、その意の存する所を示せり。曰はく、

生涯博士だちたる心を持ち玉はず、人にも書にも問ふことをな忘れ玉ひそ。自ら師とならんと思ふ一念あれば、直ちに學事に損なり。師と稱し候は、人より恭ふ稱なり。弟子と稱すれども、敎を受くるもの丶稱なり。師と云ひ弟子と云ふも、自らの口より云ふべき詞にあらず。殊に御國の學は、漢など丶は樣子異れば、師弟の別はなき趣なり。講習討論の上座とか、長座とか云ふべきものか。但しこれは小子が私論

なり。考へ玉へ云云。

と以つてその人となりを見るべし。弘化三年十月十四日病んで京都に歿す。年七十四。若狭國發心寺に葬る。著はす所、『神社私考』『假字本末』『鎮魂傳』『信友隨筆』『正卜考』等百有餘部、『日本紀』等校訂せるもの五十餘部。

述而不作

信友は常にその書齋の床上に、孔子の「述而不作、信而好古」の書軸を掲げ、吾が意を得たりとせるものなれば、その學風亦篤胤の如きと全く相反し、終始考證是れ事とせり。從つて蹠厲風發の學說は信友に期すべからず。彼れは實に正確なる考證の大家なりき。吾人茲にその神道哲學に關せる事項に就いて、彼れの考證學の一斑を示さむ。

考證學

彼れは天神地祇に就いて曰はく、

『神祇令』に、「凡天神地祇者、神祇官皆依常典祭之」また、凡天皇即位總祭天神地祇とあり。天神とは天上にまします神、また天よりこの國土に降り坐る神を稱すなり。その天地の神八百萬群神坐します中に、別に由緣ある神たちを、國々に社定めて祭給へる事、大御政の機原にして、太古より皇朝の大道なり。（神社私考）

皇朝の大道

と。かく彼れは諸國に神社を建てゝ、天神地祇を祭祀するは、皇朝の大道なりとし、以つて此れ等の諸神に就いて種々の研究を行へり。茲に聊か八幡大神に就いて彼れが述べし所のものを掲ぐべし。曰はく、

八幡宮のこと

八幡の本宮は、『帳』に豐前國宇佐郡三座（井大）、八幡大菩薩宇佐宮（名神大）、比賣神社（名神大）、大帶姫神社（名神大）と並べ載せられて、此三所同地に坐すを、惣ても八幡神と申し、八幡宮とも、又八幡三所神とも申來れり。此神の古く史に見え給へるは、『續日本紀』聖武天皇の御世に、「天平九年四月乙巳、遣使伊勢神宮・大神社・筑紫住吉・八幡二社及香椎宮、奉弊以告新羅無禮之狀」とあり。又菩薩號を唱られ給へる事の書に見えたるは、大同三年七月丙申の太政官符に、應令國司出納八幡大菩薩宮雜物事右得太宰府解�、太政官去延曆十八年十一月五日符偁、府解偁、太政官

去年十二月二十一日符倭、大菩薩並比咩神封云云。『類聚國史』に、天長六年五月丁酉、令僧十口轉讀一切經八幡大菩薩宮寺とあるなどを始て、此後もはら菩薩號を唱られたり。(八幡考)

と。而して曰はく、

いかに佛道を好み給へばとて、やごとなき大神を、菩薩としも唱し給へるは如何にぞや。そも〳〵此大神は、ことに既くよりかにかく佛ざまにあへしらへ給へるまゝにて鎮りまし、又各國におつる事なく、いと數箇所同じさまに祭られ給ひ、はた亂世の武夫等に、軍神と崇まれ給へるも、いとあやしきことになむありける。(同上)

八幡の祭神

と。かくて彼れは『神名帳』頭注に、「八幡三所者、一、八幡、二、比女神、三、大帶姫命也」とあるにより、八幡大神の祭神は、應神天皇・田心姫命・端津姫命・市杵島姫命・神功皇后となしぬ。信友の學說は要するに考證的にして神道研究の材料を供するに過ぎざりき、大國隆正の如きは則ち然らざる也。

大國隆正

隆正、通稱仲衡、葵園・如意園・佐紀の屋などの號を有せり。姓は藤原、初め野々口と稱し、後、大國と改む。寛政四年江戸に生る。父は秀馨と云ひ津和野藩士たり。文化三年、篤胤の門に入りしも幾ばくならずして父命じて昌平黌に學ばしむ。乃ち業を古賀精里に受けり。己にして以爲らく、我が皇國に生れ皇學を修めずして漢籍を學ぶ、可ならんや。須らく皇學を修め後漢籍に及ぼすべきなりと。文化七年昌平黌を辭し、四方に遊學せり。已にして父老い家を嗣き藩の大納戸武具役となりぬ。會、同僚私をなすものあり。隆正禍の及ばんことを虞れ、乃ち亡命す。以後身を專ら學業に委ね、造詣甚だ深し。天保七年播磨の小野藩に聘せられ、歸正館を起し一藩の子弟を敎育せり。當時一儒「駁本居翁書」なるものを著はし宣長の說を攻擊す。隆正乃ち門人鈴木重胤の請に從ひ「憐駁者」を著はし、更に之れを反駁せり。曰はく、

家を嗣ぐ

ある儒生外國の聖賢を虛譽するあまり、「駁本居翁書」と題せる書を筆

記して、わが神代の古傳說を蔑如せり。門人鈴木重胤之を憤り、辨せんことを請ふ。世にかゝる惑の人おほかりと見ゆれば、さる人々にも見せまほしくて、重胤が請にまかせぬるこの「憐駁者」なり。（憐駁者）

と。已にして居を京師にトし、帷を下して諸生に敎授す。名けて報本學舍と云ふ。是れより諸方の求めに應じて學を講じ、名、關西に振ふ。津和野藩主龜井侯、隆正の博學を嘉みし、諭して藩籍に復せしむ。隆正之れに從ひ、津和野と江戸とに往來し、皇典を以つて藩の子弟を敎授せり。明治四年八月十七日東京津和野藩邸に歿す。年八十。

著はす所、「本學擧要」二卷、「本敎神理說」一卷、「神代校異傳」五卷、「憐駁者」二卷、「歌學入門」一卷、「眞誥眞釋」二卷、「古傳通解」九卷、「昇降運轉」一卷、その他數十部あり。

隆正の立脚地

隆正、先づ自己の立脚地を示して曰はく、

我徒は造天地の眞說によりて、萬事を論定するにより、鬼神を有と定め、天地を神造とし、治亂興廢を神の處置とす。儒學者は造天地の眞說なき國の說によりて萬事を論定するにより、鬼神を無に屬し、天地を固有とし、治亂興廢を偶然に歸す。（憐駁者）

と。以つてその立脚地宣長篤胤を宗とせるものにあるを知るべし。かくて彼れは神道の本義を說きて曰はく、

日本國の大道

我が日本國の大道は、それらの小道（異國の敎を云ふ）と同じからず。大本を神代に起し、中を天皇に立てゝ、それより次第をおひ、おの〳〵その君父夫をうやまひかしづき、臣子婦をあはれみをしへ、交友かたみにまことを失なはず。家職產業をつとめて身をたもち家をたもち國をたもつ。そのたもついとま〳〵に己が好むいやしからぬ業をして樂しみくらすを常とす。武臣は武備怠らずして、國をかため、文人は日本の古事を悟り、外國の事にわたり、古今を知りて、國の光をみがきいだすなり。之をわが國の國體とし神道とす。神を祭ることのあつきはこ

の大本を神代にたゞしてあればなり。この故に皇統連綿として萬世かはり給はず、別に大政府ありて、おのづから大帝爵の國體をあらはし、遂には萬國をしたがへつべき芽を含めり。かくの如く大本かたく中道正しきにより、古へより支那の如き賊亂もなく、異言の人に國を奪れず。同言の人も亦皇位を奪ふことを得ず。(古傳通解)

蘭學習合

と。此の說誠に篤胤のそれを紹述せるものにして、能く神道の眞意を發揮せり。此の如くにして彼れは遂に一家を成せり。

想ふに篤胤の神道說已に蘭學に依れる所尠からざりしと雖も、隆正は更に甚しく之れを取りてその說を構成し、遂に蘭學習合の評を蒙るに至れり。蘭學を取り來る素より不可なしと雖も、その消化の十分ならざりしは彼れの說の缺點なりとす。

隆正已にその神道の精神を以つて敎育に從事す。門下爲に英才を出せり。就中その出藍の器を鈴木重胤及び福羽美靜となす。此の二人後共に

鈴木重胤

平田門に學び、前者は偉大なる學者となり、後者は有力なる實際家となれり。

重胤は、淡路の人。幼名雄三郎、後勝右衞門と云ひ、或は府生と云ふ。檀迺家と號す。文化九年を以つて生る。夙に學を好み、隆正の門に入り、その業を授かれり。後江戸に遊學し篤胤の學を慕ひその門に入らんとせしも未だ果ざりき。已にして遂に意を決し秋田に赴き、其の敎を請はんとせり。偶〻篤胤歿せしかば直に墓前にて歿後の門人となりぬ。已に平田門に入り攻學研鑽、才氣縱橫、嶄然として頭角を見はせり。而して彼れ性、豪放不羈小節を顧みず。盛に他を誹謗し、その師と雖も憚らず。爲に平田門を除かれ、後遂に奇禍を買ひ、文久三年八月十五日刺客の爲に斃れぬ。年五十二。著はす所、「日本書紀傳」百四十四卷、「祝祠講義」三十卷、「經緯歌」一卷、「世繼草」三卷、「開闢圖」一卷等あり。殊に「日本書紀傳」及び「祝祠講義」は、頗る浩瀚なるものにして、學者の參考に資すべきもの尠からず、

吾人他日之れを世に紹介せんと欲すと雖も、茲に聊かその學說の一斑を示すべし。

彼れは大道を說き曰はく、

祭を嚴にし政を正しくし、天下を整給ふ事はしも、皇祖天神より、皇御孫命に附與し奉給ふ天統高御座の御職にして、此餘に道なく、此餘に敎無く、實に隨在天神の大道此なり。(祝詞講義)

と。以つて儒佛の如きは、私道私敎にして何人も眞に之れを實行する能はざる道なるも、此の大道は如何なるものも能く行ひ得、又行はざるべからざる道なりとし、進んでその大道を、

皇祖天神の御規則に因て、須臾も離るまじき道なるが、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たる當然の道を云ふなり。孝德天皇御紀に、惟神者謂隨神道亦自有神道也と有る如く、皇祖天神の御規則即天下公正の大道にして、隨神道とは此に因准するを云ふなり。(同上)

と說明し、而して之れを更に詳に說明して曰はく、

天皇と在しては皇祖天神の授給ふ御事の依隨に、天社國社の皇神等を齋祀らせ給ひて、天下公民を撫給ひ惠給ひて萬國を經綸給ふを以て隨在天神の御行業と申奉るべく、臣下と有ては天皇の行はせ給ふ御行業に違奉らず、淨く明き心を以て仕奉り、大御政を輔相ひ輔佐け仕奉て、天下を安泰からしむべく、又大御世を無窮に傳させ給ふ中には、邂逅に神代の御規則に背はせ給ふ事も絕て無しとは申可らず。然もあらば臣の臣たる道を以て諫奏奉りて、君をして君たらしむるぞ臣下たる人の隨在天神なる美德と云可く、公民としては左にも右にも上の御趣けに因准ひ奉り、各も神賦の家業を守りて、衣食住の資となし、身を修め、德を行ひ、世の爲、人の爲に功德を建て相助け相救ひ、己を棄、佗を起し、隨在天神の大御政の少しも安からむことを須臾も忘るべからず。如此く爲る時は父子親愛有り夫婦愛敬ありて人道の極み、

因此て行はるべし。此ぞ神漏岐神漏美の詔命以て皇御孫命に事依し奉給ひし隨に、古今萬國の差別無く、天下公正に自然にして行はるゝ所の大道にして、貴賤尊卑の等差なく天下萬世に當然にして行可き所の大道なり。(祝詞講義)

と。以つて彼れが神道とせる所のものゝ規模大にして、抱括的なるを見るべし。蓋し彼れは儒教そのものの佛教そのものとしては、之れを排斥せるも、而かも「普天の下悉く皇御孫命の皇土に非ぬはなく、萬國の聖哲悉く皇御孫命の王臣に非ぬは無ければ、萬國に行はるゝ道、即我が大道なれば、惡しきを棄捐て其善を採用むに何でふ事か有む」(祝詞講義)と云ふ主義に立ち、世界の總べての道に就き長を取り、短を補ひ以つて神道を說かんとせるもの也。是れ實に篤胤の取りし所の主義也。

要するに彼れの說は、高天原を以つて太陽と解し、又は天極紫微宮と解せるが如き、その他地動說を古傳とせるが如き、篤胤の說を蹈襲せる所尠からず。從つて彼れはたとひ平田門の門人帳より省かれしと雖も、而かも事實に於いて篤胤の學派たるを失はざる也。吾人は彼れが宣長隆正の學を學び、而して深く篤胤に私淑し、篤胤の學說を取長補短し極めて雄大なる學說を構成せんと努めしの功は、明に認容するもの也。

以上述べ來れるが如き、德川時代に於ける復古神道派の運動に對し別に方面を異にせる二個の神道あり。一を水戸流の神道派となし他を黑住、井上等宗教的神道派となす。

水戸流の神道

藤田東湖

水戸流の神道は、潘祖光圀の主義によりて、藤田幽谷、其の子東湖、幽谷の門人會津正志等によりて盛に唱道せらる。其の說く所我が神道は儒教と背馳するものにあらずとなし、宣長等を以て道教によりて其の說を立せるものとなし、甚しく之れを排斥せり。藤田東湖は曰はく、

近世古學を唱ふるもの、古言を錯綜し、舊事を網羅し、考證の力勤めたりと謂ふべし。而れどもその道を論ずるに至りては、則ち天下の

吉凶禍福を擧げて諸れを直毘禍津日二神に附し、清淨自然を以つて、人道の極致となす。その言頗る辯ずれども、之れを要するに、皆老莊の糟粕。その徒亦自らその說老莊に類するを嫌ひ、乃ち曰はく、「老莊の所謂自然は、猶未だ聖人の道に溺るゝを免れず。吾が所謂自然は、皆神意に本づく」と。特にその弊必ず胸臆に任じ、私智を逞くし、剛復自ら喜ぶに至るを知らざるのみ。(弘道館記述義)

と。以つて宣長等の努むる所は、私智を以つて神代を測るものとし、その學を排斥せり。

若し夫れ會澤正志に至りては、特に書を著はして、堂々宣長の說を反駁辯論せり。正志は、東湖と相並び、水戸派の學者の錚々たるものなれども、世、東湖の如く、之れを知らず。正志名は安、字は伯民、通稱恒藏、正志齋と號す。宣長の歿せる當時正に成年に達せり。生れて學を好み、東湖の父幽谷の門に入り、その高第弟子たりき。彰考館寫字生より、身を起し、遂に彰考館總裁となり、後種々の職に轉せり。常に東湖等と國事に奔走し、文久三年を以つて歿しぬ。年八十二。著書、『孝經考』一卷、『讀直毘靈』一卷、『讀葛花』一卷、『新論』二卷、『正志齋雜錄』一卷等あり。

彼れは常に水戸流の神道を信奉せり。その說に曰はく、

夫れ天地剖判始めて人民ありてより、天胤四海に君臨し、一姓歷々未だ嘗て一人の敢へて天位を覬覦せるものあらず。以つて今日に至るものは、豈に其れ偶然ならんや。夫れ君臣の義は、天地の大義也。父子の親は天下の至恩也。義の大なる者、恩の至れるものと、天地の間に並び立ち、漸漬積累、人心に洽浹し、久遠にして變せず。此れ帝王、天地を經緯し、億兆を綱紀する所以の大資也。昔は、天祖肇めて鴻基を建つ。位は即ち天位、德は即ち天德、以つて天業を經綸す。細大の事一も天に非るものなし。德を玉に比し、明を鏡に比し、威を劒に比

し、天の仁を體し、天の明に則り、天の威を奮ひ、以つて萬邦に照臨せらる。(新論)

と。而して曰はく、

神聖既に神道を以つて敎を設く。民心を緝收する所以のもの、專ら一より出づ。固より成規あり。而して天に事へ先を祀るの意、之れを後世に傳ふ。民、本に報い、始に反るの義を知る。(同上)

と。かくて彼れは、堯舜周孔の道、天祖の彝訓と大いに同じと說けり。是に於いてか、彼れは、佛敎を罵りて、神明の邦を變じて、以つて身毒の國となし、中原の赤子を駈りて、以つて西戎の徒屬となす」と云ひ、儒佛的神道を嘲りて、「儒佛を剽竊してその言を緣飾し、以つて口を糊するの資となす」と云ひ、而して我が宣長を攻擊しては、曰はく、

本居の翁、數千歲の後に生れ、開闢以來一人も云へることなき無稽の妄說を造言し、數千歲知るものなくして、是を知りたるは己一人のみなりしと思へるか。然らば開闢以來天地闇夜にして、本居に至て始て明なりと云はんか。數千歲本居の道なしと雖も、世道人心に於いて一も闕けたることなかりしに、今新に一箇の道を作り出して何の用をかなさんや。上古より人々離れ得ざるは天下の公道也。古より知るものなく是を離れ居りて害もなかりしを、獨、智を以つて作り出して、數千載の公道と相反するは一己の私言也。(讀直日靈)

と。蓋し宣長は力を極めて儒敎を排斥せるもの、而して正志は神儒一致を說き、大いに堯舜周孔を尊敬祖述せるもの。その說の一致せざる素よりその所也。

正志を承けて栗田寬あり。亦水戸に出づ。文科大學授敎文學博士たり。明治卅年一月廿六日を以つて逝く。年六十五。その說に曰はく、

天地開闢の始、未だ文字あらざるの時、天祖あり、天神あり、天祖の行ふ所、天神の言ふ所のもの、萬民從つて之に經由し、之に遵奉し

て違ふことなきを道と云ひ、教と云ふ。

と。かくて彼れは水戸流の特色を帶びて、儒教によりて、神道を說けり。而かも勿論神道を主とせるものにして、朱髯綠眼の非類など往々極端の言をなせりと雖も、又「後世學者狹隘の見を懷き、同を合せ、異を兼ぬること能はず」と云ひ、偏狹徒らに他を排斥するを歎せり。以つて其の志の存する所を知るべし。

宗教的神道

宗教的神道は、吾人の已に述べたる中古の佛教的色采を帶びたる山王一實神道、兩部習合神道、唯一神道の如き、尙幕末に至るまで勢力を有し來りしが、別に幕府の初期に長谷川角行なるものあり。皇國は萬國の宗國にして、富士は地球の鎭守たりとし、富士講を初めたり。されど富士講には種々の弊害ありしかば、幕府は之れを禁止したり。

徳川時代にありて、宗教的神道を鼓吹して其の名を知られたるものに、黑住宗忠あり。

黑住宗忠

宗忠は備前の人、安永九年を以つて生る。生れて至孝、年三十三、父母の死に遇ひ悲哀の極に達せり。窮すれば則ち通ず。遂に豁然悟る所あり、一派の神道を創む。嘉永三年歿す。年七十一、後、宗忠大明神の宣下を蒙る。その說、「神國の人に生れ常に信心なき事」、「腹を立、物を苦にする事」、「己が慢心にて人を見下すこと」など七箇條の信條を示し、天照大神を主神とし、極めて熱心にその神道を說きたり。之れを黑住教と云ふ。宗忠と殆んど同時に井上正鐵あり。

井上正鐵

正鐵は武藏の人、寛政二年を以つて生る。長じて白河家の門に入り遂に一家を成せしかば、信徒日に集る。新說世を惑はすの嫌疑により、伊豆の三宅島に流さる。島民その教を奉ず。嘉永二年二月島中に歿す。年六十。明治維新の後、その信徒等相議して禊教を立せり。

幕末の宗教的神道を唱へたるものに、尙　川手文治郎あり。竹澤寛三郎あり。又記する所あるを要す。

川手文次郎

文治郎は備中大谷の人。人となり至誠、年四十二、大患を病み、專心神に祈り、癒ゆるを得たり。是に於いてか益〻信念を强くし、遂に神託を受け、天地金乃神を立て、之れを天地主宰の神とし、忠孝彝倫の敎を說けり。之れを金光敎と云ふ。明治十六年十月十日を以つて逝く。

竹澤寛三郎

寛三郎は東洋と號す。阿波の人、後姓名を改め、新田邦光と稱す。その說、造化三神を主とし、伊弉諾伊弉冊二神は、天神の命を受け、國土を修理固成せらる。故に修理固成の神事は、人世の最大要義なりとし、五倫五常の如き、皆是れより出づとなせり。之れを神道修成派と云ふ。

明治維新

此れ等宗敎的神道の民間に勢力を布殖すると同時に、中流以上の社會には、本居、平田一派の神道偉大なる勢力を占め、明治維新の鴻業と共に、神佛習合の弊を打破し、大いに固有の大道を發揮せり。此の時に當り、明治天皇は大詔を發せられ、宣はく、

今也、天運循環、百度維新、宣明治敎以宣揚惟神之大道也。

と。尋いで敎部省は三箇條の敎則を頒布せり。曰はく、

第一條　敬神愛國の旨を體すべき事。

第二條　天理人道を明にすべき事。

第三條　皇上を奉體し朝旨を遵守すべき事。

是れ也。當時事皆未だ緒にかず、制度種々に變遷せしが、明治十五年に至り、神官、敎導職の兼務を禁ぜしかば、從來の宗敎的傾向を有したる敎派は、玆に各〻別派獨立固有の大道に基いて宗敎界に雄飛せんとするに至れり。即ち伊勢にありては、大宮司田中頼庸本官を辭し、神宮敎の管長となり出雲大社を中心とする大社敎亦獨立せり。而して黑住敎は已に明治九年に獨立せしが、吾人の已に述べたる長谷川角行の創唱せる富士講は、明治の世となり、二派となり、一は實行敎となり、一は扶桑敎となれり。別に平山省齋は大成敎を起し、芳村正秉は神習敎を立し、下山應助の唱へたる御嶽神社を信仰の中心とせる御嶽敎は、もと大成敎に屬

せしも是に至り又獨立せり。此れ等各派に屬せざるものは、子爵稻葉正邦を管長とし神道本局を立せり。然れども之れに屬したる禊教、神理教、金光教、天理教等は久しからずして皆獨立せり。此れ等の宗教局に於いて取扱はるゝ神道に對し、神官神職の方面は、荷田、賀茂、本居平田所謂四大人の教を奉じ、神社に奉仕し、純粹なる固有の大道即ち歴史的宗教的色彩を帶びざる惟神の大道を宣揚せんことを努力せり。

神道史綱要

終

大正四年七月十八日印刷
大正四年七月二十二日發行
大正四年七月二十八日再版發行

神道史綱要
定價 金貳拾五錢

著作兼發行者 東京市四谷區鹽町三丁目四十四番地 田中義能
印刷者 東京市京橋區築地二丁目五番地 岡田榮松
印刷所 東京市麹町區内幸町一丁目四番地 三生舍
發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 日本學術研究會

大取次
東京市本郷區本郷五ノ二五 振替口座東京壹壹五七貳番 會通社
東京市神田區表神保町三 振替口座東京貳七〇番 東京堂

不許複製

田中義能著述目錄

- 系統的西洋教育史　既刊（絕本ナシ）　全一冊
- 最新科學的教育學　既刊　全一冊
- 家庭教育學　既刊　全一冊
- 平田篤胤之哲學　既刊　全一冊
- 神道哲學要義　既刊（絕本ナシ）　全一冊
- 神道哲學變遷史　既刊（絕本ナシ）　全一冊
- 神道本義　既刊　全一冊
- 本居宣長之哲學　既刊　全一冊
- 神道大意　既刊　全一冊
- 神道史綱要　新刊　全一冊

文學士　田中義能先生著

平田篤胤之哲學

洋裝上製全一冊
定價金貳圓
郵稅十二錢

賜天覽

『大阪毎日新聞評』田中義能氏の「平田篤胤之哲學」は、神道國學の人傑を思想上哲學上より評傳した書としては、殆ど初めて從なものであらう。是まで朱子學古學等儒家の學說に就いての述作はあるが、皇學家をこれほどに系統的思想的に論じたものは記者は未だ見なかつた。篤胤は本居の先導者となつて開いた獨自的皇學論を一層積極的に批評眼を開き宗教觀に至つて殊に生面がある。「神はわが神なりわれは神の人なり」と言つたのなどは最もその思想の超凡を證せらる。

田中氏の此書は、多方面に能く篤胤の思想を解剖してある。信仰對象論の如き、此書の標榜する所に背かぬ。但だ國家と宗教の論、其他になほ百尺竿頭の一歩ありたいと思ふ處があるが——學界思想界の爲に、此偉大な思想家——儒佛を超脫して日本的獨自の思想を發揮した——篤胤を活描し來つた著者の勞を多として、此書を推薦す。

文學士　田中義能先生著

本居宣長之哲學

洋裝上製全一冊
定價金貳圓拾錢
郵稅十二錢

賜天覽

『萬朝報評』本居宣長が神道哲學の鼓吹者として將た國學者として、我國思想史上の大立物たるは言はずもがな。其赤誠をこめたる忠君愛國說の、やがて維新の鴻業に及ぼせる影響も亦甚だ大ならずんばあらず。著者蓋に平田篤胤之哲學を著して、今又此偉人を說き、學說は勿論進んでその學統に關する多數學者の諸說をも叙し、所謂復古神道學派の哲學を明にせんとしたり。考證頗る之を努め所論穩健……能く其時代と人とを面影を說き得たるか見る。

發賣所　東京神田　東京堂書店　振替口座　二七〇番

學校及家庭教育ノ寶典

日本大學教育學講師
東洋大學教育學講師　文學士　田中義能先生著

新刊　家庭教育學

洋裝　全一冊
定價金壹圓四拾錢
郵税　十二錢

「萬朝報」評　家庭教育に就て學校教育社會教育など、共に一個の特立したる教育學たらしめんとして、之を系統的に論述したるものゝ如き此家庭教育學なり、編を分つこと八、更に之を二十九章八十九節に分ち家庭教育の意義由來目的より始めて、結婚住居産褥産婦教育産補乳子守疾病看病智育情育意育母の任務家庭教師などに至るまで、極めて微に入り細に亘りて詳述し擧げられたる項目の數のみにても實に四百數十の多きに及び、述論に整然として頗る要を得系統的に論述されたる此種の著書として蓋しオーソリチーたるに足らん、加ふるに口語調にして採りて平易なる記述を試みたるは双手を擧げて吾人の最も歡ぶ所、評者は此書を一般家庭の珍として推奬するに吝なるものにあらざるなり

「東京日日新聞」評　兒童の成長後如何なる人物となるゝかは兒童の遺傳、性癖、境遇等に基くと雖も亦家庭の教養如何に關係する所多し自ら一世に卓越せる顯官たり帝位にあるものと雖も其子にして往々不良低能の子を養ひ自ら憂慮と不快とに捕はれつゝあるは現世幾多の實例あり是に於てか家庭教育の問題は實際問題として蓋し痛切なるものあらずんばあらず本書は著者かこれを救濟せんとして公にしたるもの的より說き起して根柢論たる結婚住居産褥産婦教育に及び養護論に入りて出産産褥子守疾病傳染病者の說き智育論に入りて初歩の教育家庭教育社會教育を論じ衣服睡眠入浴子守を論じて救濟法に其實說を尤も痛快に髣髴せり情育論は專ら意志の陶冶習慣の養成を說き家庭教育の印象を論じ餘論として母の任務家庭教師等の事を論ずる子を持つ父母たるものゝ一讀すべき良書たり

最新　科學的教育學

布製　全一冊
定價金壹圓八拾錢
郵税　金十二錢

東京朝日新聞評　著者は嘗に「系統的西洋教育史」を公にせし人なり。此の書は四洋に發達せる思想と教育とを研究し之を骨肉として、更に東洋殊に日本固有の思想と教育とを研究し之を精神として一大系統的教育學を組成せるものにて、體系の整然たること、議論の穩健なること、此の書の特色なり。

哲學雜誌評　文學士田中義能氏は教育學は純粹に學なりさいへど、歐洲人の教育學は歐洲國民的彩色の基になれるなり。只西洋輸入でなく、其れに國民的精神を着色することを忘れてはなれぬといふ意見を持つて居る。是等の意見が則ち本著科學的教育學である。本書は注意の能く行屆いた、洗練の文に、本邦に於ける教育學も諸方面の問題に普くふれて、所謂まめに手際に出來上つたものゝ如き思想は太だ穩健、且つ豐かな行文は最も流暢、思想は本書の特色である。讀者は必ずや此に由つて教育學の智識を新にし、且つ居る人である。又氏は最も流暢、思想は本書の特色である。讀者は必ずや此に由つて教育學の智識を新にし、且つ居るのは氏の特色である。

東京神田　株式會社　同文館　表神保町

324
456

終